

中山間地域における親子の居場所づくり、心地よさを求めて、一軒村

2025.02.20to

中山間地域 親子居場所 心地よさ 一軒村

1. はじめに 1.1 目的

最近、個の埋没傾向や住みにくさの改善として「居場所づくり」が全国的に展開されており、また現代文明と対比して伝統文化を重んじる傾向の一つとして古民家ブームも静かに定着している。古民家を核にした居場所づくりも目を見張るくらい賑わってきている。

著者は片田舎に住んでいるためか、世の中の動向を踏まえている訳ではなく、たまたまアニメ「おおかみこどもの雨と雪」(2012年公開)がヒットしたことで、アニメのイメージモデルとなった現存する中山間の古民家(花の家、お家)及びその周辺環境を保全する活動を当初から続けている。ただただ「ゆるゆるのんびり」と活動していたところ、遅まきながら、お家と周辺風景が期せずして「居する心地よさ」を親子で堪能できる場となって今日に至っていることに気づいた。そこで、このことが世の中でいう居場所とは違った様相にあるだけに、中山間におけるお家を介して繰り広げられるひと時を親子と子どもの物語として紹介することにする。これが本稿の目的である。

1.2 問題の所在

親子の中山間でのひと時が何故に着目し論述するのか。それは、世の中の親子を取り巻く環境に種々問題があるから、といえる。本稿では親子物語の紹介とはいえ、今日的背景にも若干切り込むとして論を進める。(1)親の視点から； 今日的様相を列挙(社会に向けての視点)。A. 多くの場合； 多忙ゆえか、子どもには何かにつけ「早く」とせかす、怒りぎみ。何かと子どものせいに(親は後悔)。

スマホで子守りもちらほら(親はかまひ過ぎ技術になれっこ)、遊びよりも勉強を(親は子の将来を思って)。B. 今の状況に批判的な場合； 何もしない。子どもの好きなように。昔のように。自主性尊重。現代は「かまひ過ぎ」、世の中全体がそうである。

(2) 子どもの視点から； 子どもは親を見て育つので、親は子どもを第一にするあまり、子は親の顔色を伺うことまあり。気遣いではなく、子は保身せざるを得ず。

遊びは自然行動、子どもの営みであり、体の成長、思考・学びへと本能的に磨かれている。

(3) 家庭では； 安心・コミュニケーションの場として、共に(同じもので)食事し、一つ屋根の下で共なる生活は安心感に。

家庭と街の関係は、家庭から雰囲気周辺拡散し、街は多くの家からなるいわば大きな家となる。

(4) 居場所とは家庭や街本来の雰囲気が充満。雰囲気とは場と人がつくるもの。

(5) 本稿では場と人、場と親子の行動からの雰囲気づく

りに着目。第1章にて筋 1.3 以降に理屈を述べ、第2章以降に実際の様相を記す。

1.3 お家・周辺の「人間と場の環境」構成

世の中、多くの問題が親子に降りかかっている。それは社会といういわば大きな環境が個の世界に押し掛かっているためである。ではお家の環境はどうなのか。そこで、子どもと社会の論ではなく、ごく身近な場での自然な行動に着目して、いわゆる古民家環境とは違った観点で論考する。

(1) 居場所は場における人の営みで成立；お家という居場所において、毎日実施(居場所提供)の必要性が分かかっていても現実には難があり、ゆえに運営日を間引くことが多い。それでも、出向く方々(訪問者)は居場所に期待し、これに受け入れ側が応えている。そこでは、何気ない当たり前の自然な行動が可能となっている。だからこそ、お家では平日無人(管理人)体制でも目的が遂行できる。却って無人だから来場者がお家のオーナーに導かれたような感覚になるのであろう。もちろん、有人管理の日には大いに盛り上がる。

(2) お家では、来場者自身が自ら場に関わり自ら営んでいる；受け入れ側はいつも無人であり、たとえ有人であっても、来場者とは同格であり、サービス提供側と受け入れ側といった認識はそこにはない。理由は入場無料もあるが、「場の環境は皆のもの」という意識が潜在的にあるといういわゆる極自然な状況によるゆえである。

(3) お家とその周辺では、自然行動を誘発させる；これこそがお家・環境のなされる業である。以下に3点述べる。

第一は、お家という場には、人が長く住み営んでいた歴史が漂っている(お家が無人であっても人の息遣いが感じられる)ので、来場者があるような歴史に自然と包まれているかのようになる。第二は、古民家が森の中にひっそりと自然に溶け込んでいる。第三は、お家の縁側が家の外と内をつないでいる。人や大気のもろもろが縁側を介して出入りするので、訪問者は一段と自然の中に親しむことができる。

(4) お家へのアプローチが期待感を高揚させる；お家は山麓からは登坂山道となり、周辺の森の中、自然散策しながらの徒歩登坂となる(車もあり)。また取り付け道からお家へのアプローチも、別世界への入り口として雰囲気がいやがうえにも増している。これは何回も訪れても褪せることはない。

1.4 お家・周辺について概要

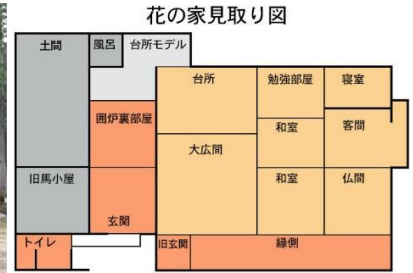
(1) アニメ「おおかみこどもの雨と雪」の概要；

大自然のもと、幼子(雨と雪)と母(花) がくりひろげる愛情物語。子どもは狼と人とのハーフであり、弟(雨)は

狼の道を、姉(雪)は人の道を選択して巣立つ。

(2) 管理運営活動；

お家の維持管理、周辺の環境環境保全について



写1 お家、外観、平面図、各部屋

は、当初、当該の町が

実施する機運もなく、ほぼそと関係者で実施していたが、そのうち手伝う方々が増え、ならばとのことで2014年にNPOを設立。お家・周辺の一般開放により、来訪者とスタッフでつくるアニメ世界の保全と共に、来場者には楽しい体験の一助が実現している。

(3) 情景；舞台は中山間のお家とその周辺。そこにあるのは、a. 大自然；山あり、森あり、川あり、動植物、農環境(棚田・畑)、b. 人間環境；農村の暖かなコミュニティ、そんな自然や人間の環境のもとの子どもの成長環境あり

2. お家の概要(写1)

(1) お家；富山県大岩地区で当初(2007年頃)はハイカーの休憩家として開放。2012年アニメのヒットでイメージモデル「花の家」の人気が増す。

(2) 来訪者；年間1万人、20~50人/日、GW時期200~400人/日

(3) 来場者のお家・周辺での様相；まずはくまなく家の中を一巡。思い思いの場に陣取。

(4) 縁側、広間、和室、囲炉裏場、庭にて；
・和室・縁側；お茶飲み、お絵描き、絵本読み、時折味噌汁食、外雰囲気ぼんやり鑑賞

・大広間；食事、遊ぶ、描いた絵の掲示、芸の場、
・囲炉裏場；夏以外暖を、時折食事

・庭；花壇の花鑑賞、外遊び、
・畑；ジャガイモ植え付けと収穫、
・森林散策、
・ハイキング、
・城ヶ平山

3. じゃれつき、寝転がり(写2)

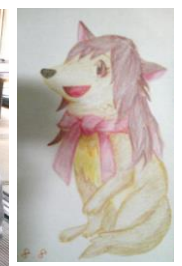
お家が広いので、じゃれたり、寝転がったり、子どもは自由奔放に行動。親も子を自由にさせている。制限する代物が無ければ、こうも自由に振る舞えるのか、ということである。

4. お絵描き(写3)

和室や縁側で、お絵描きに夢中の子ども。親も好き



写2 左；玄関でじゃれつき 右；大広間で寝転がり



写3 左；縁側でお絵描き 中；和室で 右；雪ちゃんの絵



写4 左；絵本 右上・右下；本を見たり

にやっておられる。そんな雰囲気が家内にあるものだから、もちろん大人もお絵描きに挑戦。主に、おおかみこどもを描くが、風景やお家外観のスケッチもある。

5. 読み語り(写4)

「おおかみこどもの雨と雪」の絵本が出版されている。この絵本を親が子に読み聞かせしていたところ、感極まって涙声になった。周りにいた大人たちももらい泣きで、ほろりと涙した。

いろいろな方にどんなシーンが感動的かを聞いてみると、雪上で親子が寝そべってるシーン、子どもの巣立ちのシーン等が人気のシーンという。



写5 左;紙芝居講談中 右;壁面系の絵画鑑賞

6. 絵の鑑賞、芸の鑑賞(写5)

・展示;和室や縁側で描いた絵を大広間の壁に掲示。いろいろな方の絵を見る大人と子ども。

・芝居鑑賞;子ども遊びのアマ芸人が現れて、紙芝居を演ずる。子どもの大人も、紙芝居に物珍しく興味深く聞き入っていた。



写6 左;囲炉裏部屋で食 右;皆さんで歓談

7. 暖を取りながら(写6)

囲炉裏の部屋では、早春、晩秋、冬の時期にストーブで暖。お茶を飲んだり、トントン焼きをストーブ天端で焼いたり。銀杏焼も。

静寂な雰囲気の中で各家庭の方々がすわり、食す時は特に会話がはずむ。



写7 左;縁側で汁物食す 中:大広間で会食 右;縁側でスイカ食す



写8 左;大人も子ども出入り 中:踊る子ども 右;子どもが縁側集る

8. 食の堪能(写7)

いつもは呈茶で皆さんと我らが歓談。時折来場の家主さんは「訪問の皆さんが折角来られたから」と振舞もあり。夏はスイカ、春秋では縁側にて汁物、晩秋には大広間で食事会。東京から偶然寄った女性たちもご相伴にあずかり、感激して美味しくいただきました。



写9 左;植え付けのため畑の耕し 右;収穫でご機嫌

9. 内から外へ、外から内へ(写8)

縁側が家の内と外とのつなぎ役を果たす。子どもが外庭で遊んで中に入ったり、またその逆も。子どもは縁側が大好きである。そんな子どもにつられて、大人も出たり入ったりで、楽しんでいる。

10. 農の堪能(写9)

折角なら農作物を自らつくり育てることも。子どもには大きな体験と考えて、アマでは主人公がジャガイモを栽培していたので、ジャガイモの植え付けと収穫の体験ができるよう、春蒔き秋蒔きの二本立で農体験を設定した。農作業は耕しから始まり、子どももいうに及ばず

慣れない作業に汗を流していた。さすがに収穫の時は、子どもはご機嫌であった。なお、耕しの時、ある親子が親子とも主人公と同じコスチュームを着て参加し、大いに満足していた。

11. ハイキング(写10)

お家からはすぐそばに(裏山のような)城ヶ平山があり、よく小学校の課外活動としてお家をベースにお山にハイキング。お家からは鬱蒼とした森を突き抜けて山頂に至る。展望抜群。名峰剣岳や我が町が展望できる。

12. ストレスを抱えたお子さん(写11)

不登校児童の方も一家でやってこられる。皆さんはさすがにお家ではリラックスされていた。抑圧された学校にうんざりの子どもは、場や人の環境が醸し出す安心感に浸っておられた。特に、スレスレを内にためていた子はすぐに「キーン」と声を発するので、すかさず狼の叫び声「ウー」でやってみてはと勧めると直ぐにその気分になっていた。これをもっても、中山間域では平場における同調拘束がなく、訳有の子どもはもちろん、一般も子どもや大人も安心して自由に伸び伸びできることを再認識する次第である。

13. 皆さんの声

(1) 子どもとの対話；・小さな子供はアニメ世界と現実世界の区別がつかず、両者一体と認識しているためか、よく「雨と雪」に会いたい、とやって来る。その時はすかさず、「買い物に出かけていて今日は帰ってこない」と返答。すると、「つまらない」としょんぼり。さりげなく「大丈夫大丈夫」と。・家出中学男子がママやって来る。「花母さんに会いたい、悩みを聞いて欲しい」と。まずは理由を聞く。アニメ世界と現実の区別を説明もする。もちろん、親御さんもやって来られ、とにかく円満解決となった。周りの方を含め、「よかったよかった」や「やれやれ」。

(2) 大人の場合；(写12)

・若い方；人生観が変わった、と感動あらわな若者、特に女性が少なからずおられる。何がそうさせるのか、花母さんの生き方に感動されたかのようなのである。また、カップルの場合、たぶん女性がリードして男性もまた感動しているようだ。とりわけルルのカップルの方々は、幸せいっぱいなので「入籍した、ここでポーズ、新婚旅行はここが最初、等」の色紙を残しておられた。訪問者の多くが、そのような色紙を見てうっとりとしてされていた。なお、中年男性でも花母さんに惚れたという方がおられたのでびっくりだったが。

・多くの方が家に備え付けのお家ノートに自由記載で皆さん書いていかれる。事細かく感想をかいいたり、感動を記したり、人さまざまである。

・いくつかびっくり毎を記す。面識もない家主の方に遠路はるばるお土産を持参の方(ママおられる)、ここを第二の古里にしますと東京(柴又)の方の弁。人間模様はさまざまである。

14. おわりに

本稿では、アニメ「おおかみこどもの雨と雪」舞台モデル「花の家(お家)」において繰り広げられる「親子の自然な行動」や「それをなす人と自然の環境のありがたみ」を紹介した。

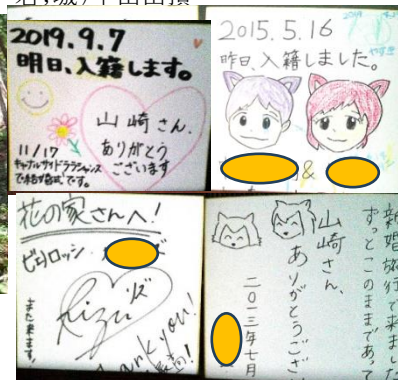
(1) その意図は；・居場所の兼ね備える要件に言及する、・多くの居場所論、ひとつのあり方を「花の家」にて実践する、・訪れる方々の心意気が自然と場の雰囲気醸し出す。



写10 左;名峰劔岳 右;城ヶ平山山頂



写11 お家のそばの山林



写12 カップルからのメッセージ

(2) その心は；・なすがままの自然を心地よさとして満喫し楽しむ、

・それが親子の営み。それをご自宅に(多少なりとも)持ち帰り、とにかく良い体験の積み重ねの一助となることであろう。

(3) こうしたことが可能となる要件は次のとおり。

・お家の広い空間と周辺の自然、ローテク(ヒューマテク)、お家の歴史(先祖代々が常に住んでいる感)、先住者(ボジャマン・ハグマン)の存在、内と外の連続(お家と自然)。

(4) 訪問の親子は、お家にて「へえー、わあー」の自然な反応をされておられる。そんな光景を見るにつけ、我ら「これが原点」かとニコリしながら、「人と自然と建築」なる環境をしみじみと心地よく感ずる次第である。

15. あとがき

本稿では、「日常生活の営みの充実」を主張し、たまたまご縁のある中山間域での活動を報告とした。もちろん、この種の活動について都会の住みづらさ改善とか現代文明批判とかいった効率重視社会の改善を念頭においた活動も確かに必要と思っている。ここでは、そうした問題への解決については、あくまでも日常生活の充実を積み重ねていくことが向けた何気ない当たり前の一步では考えている。

また、この種の問題を専門家としてどう考えるかについては、現代文明批判にもっていく前段階として、市民の日常に寄り添う前にただ隣にいて十分のように思う。こうした充実こそが小さな村(一軒村)づくりのパワーになるかと思ひ、そんなアプローチがあってもいいし、そんなアプローチを地で何の気負いもなく楽しんでいる、という報告が本稿である。

A. 謝辞；事業推進のNPOの山崎理事長、川端副理事長、関係各位に感謝申し上げます。